

修士論文

北京市南鑼鼓巷における観光地化のプロセス

—政府と民間の役割に着目して—

The Forming Process of Tourism Destination in South Luoguxiang, Beijing

: Focus on the Roles both of the Government and the Private

孟 小詩

MENG Xiaoshi

キーワード：歴史的街区、政府と民間、観光地化の過程、南鑼鼓巷、北京

Keywords: Historical District, Government and Private, Forming Process of Tourism Destination, South Luoguxiang, Beijing

1. 研究の背景と目的

1990年に北京において『歴史文化保護区』という面的な保護体系が確立されて以降、現在までに43ヶ所の街区がその指定を受けている。そのうち旧城には33か所が分布しており、6か所が観光地化している。歴史的街区を利用した観光に関する研究は、各分野において多く見られるが、中国のように経済が急速に成長しており、かつ政治環境が特殊な国において、歴史的街区がどのように開発され、同時にどのように保護が前進するのかについては一つの課題として取り上げるべきだと考える。

2000年代から、2008年の北京五輪を迎えるための胡同と四合院の整備事業が、政府によって急速に行われた。同時に北京の魅力要素として胡同と四合院を国内外にアピールするべきであるという議論が起きた。それは北京における政府による歴史的街区の観光利用の端緒となる。しかし観光開発が開始されてわずか10年程度であるにもかかわらず、過剰な商業化によって歴史的雰囲気が消滅してしまった。よって歴史的街区における観光地化のプロセスを究明し、存在する諸問題を浮き彫りにして課題として取り上げることが重要である。よって本研究では、大規模な改造がされなかった歴史的観光地の代表として北京市南鑼鼓巷を取り上げ、そこにおける観光地化のプロセスを

明らかにし、政府と民間の両者が観光地化にそれぞれどのような役割を果たしたかを考察する。

2. 研究の方法と手続き

主要な研究方法としては、下記通りである。

1) 統計データの分析

筆者は、北京市政府が編纂した『北京旅行統計年鑑』(1995-2015)と『北京東城年鑑』(1996-2014)という二つの統計データを主に分析した。『北京旅行統計年鑑』(1995-2015)を用いて北京市におけるインバウンド観光、国内観光と市内観光の年別統計データを分析した。そして『北京東城年鑑』(1996-2014)のうち、南鑼鼓巷に関する情報を分析し、政府がどのような整備事業を行い、その他にどのような活動を開催したかをまとめた。

2) 文化財の調査

2014年8月に文化財に関する現地調査を行った。南鑼鼓巷における文化財の位置、登録年、登録レベル、利用方法、公開の有無などを把握した。

3) 店舗調査

2014年8月に南鑼鼓巷全エリアにあるすべての店舗の種別、位置をまとめて分類し、3章のデータとして使用した。さらに、店舗の外観と内観を観察し、作り方(改築具合)別に類型した。2015年8月には、そのうちの41軒の店舗の店主たちからアンケート調査を行った。店舗の作り方(改

築の手法),そして改築する際に政府の規制をどの程度遵守したのかについて聞き取りを行った。さらに,南鑼鼓巷で店舗の経営を始めた理由,南鑼鼓巷に対するイメージ,出身,経営する際に大事にしているものについてアンケート調査を行った。

3. 研究の概要

本研究は五章で構成されている。

第一章では,研究の背景,研究目的と研究方法,研究対象地の選定理由と地域特性を述べた。

第二章では,中華人民共和国が成立してから現在までの北京の都市計画の流れを整理し,都市開発及び保護事業の変遷の要点をまとめた。その結果,南鑼鼓巷が特別に扱われてきたわけではなく,偶発的に残され,かつ偶発的に観光地化してきた歴史的街区であることが明らかになった。従って,北京の都市開発及び保護事業において極めて特殊な事例であると,南鑼鼓巷を位置付けた。

第三章では,政策を精読することで,文化財の登録状況及び観光施設の展開を整理し,南鑼鼓巷における観光地化の過程を分析した。その結果,政府によって文化財の指定,修景及び整備事業が行われたことが明らかになった。そして,民間による文化財周辺での開発活動が活発になり,結果的に政府が景観維持を通じて民間の開発をサポートするような役割分担が実現できたということが明らかにされた。

第四章では,政府の発展計画および規制に対して,民間がどのように対応したのかについて,事業者からの聞き取り調査を通じて考察した。民間事業者は歴史的街区の保護よりも経済的利潤を追求していたが,歴史的遺産を活用した観光施設を建設していた。すなわち,南鑼鼓巷において古い町並みが維持できている要因は,政府の規制によるものではなく,各民間事業者の意識によるものであることが明らかになった。

4. 結論

- ①南鑼鼓巷は偶発的に残された。
- ②南鑼鼓巷が観光地化した過程は四段階に分けら

れる。第一段階は保護意識の定着期である。第二段階は観光開発の萌芽期である。第三期段階は観光開発の全盛期である。そして第四段階は観光地化の成熟期である。

- ③北京の歴史街区が観光に利用されはじめたのはここ10年間のことである。それまでも前門のような急激な観光開発が行われた歴史街区は存在するが,開発の手法に着目すれば,南鑼鼓巷の事例は歴史的風貌を活用した最新かつ急速に発展した事例である。すなわち,南鑼鼓巷は北京において最後に観光地として認識された後発的なエリアとして位置付けられる。その大きな開発主体となっているのは急速な経済発展の中で誕生した民間の事業者である。
- ④政府が直接的に観光開発に貢献した点は,文化財を公開して見せる,もしくは文化財に銘板を設け,展示物にすることのみである。それに対して民間は,当然保護対象に対しての開発はできないが,保護対象の周辺でのエピソードを語ることを通じて,結果的に歴史的資産を活用している。したがって,政府側が文化財の指定および整備事業を行うことを通じて風貌回復を行い,民間側が開発の中心になっていた。すなわち,結果的に政府が景観維持を通じて民間の開発をサポートするような役割分担が実現できおり,現在のまちの魅力が構築された。
- ⑤南鑼鼓巷の事例がこれまでの歴史的観光地と異なる点は,大規模開発が実行されなかったことである。その内状には,政府と民間との意見が互いに交わされないことがあった。
- ⑥南鑼鼓巷では歴史的街区を活用した民間による観光開発が盛んである。それらは概して,歴史的街区の保護を目的とした観光利用ではなく,経済的利潤を大義とした経営者によって行われている。経営者の意識が低いままでは歴史性や文化性は危険である。経営者が持つ歴史街区に対する意識を高めるためには,政府の力が必要不可欠である。■